

全日本中学校長会賞

生命保険は「もしも」に向き合う力

北海道 藤女子中学校 一学年

前田 海音

「あれ、私、生命保険入ってないの？」

母が書類のファイリングをしていた時のことだ。家族それぞれの保険証券がある中、私の名前が記載されたものがないことに私は気づき、母に尋ねたのだ。「海音は持病あるから、生命保険入るの難しいんだよ。入院もするし、後々手術の可能性も高いよね。健康な人より保険金や給付金が支払われる確率高いから、公平じゃなくなるから仕方ないのさ。十八歳までは私の保険の特約で保障はあるんだけどね。」

母は歯切れ悪く答えた。私は三歳から指定難病の加療をしている。慢性疾患であるため、生活上の制約があることは理解していたが、生命保険の加入にも制限があるとは知らなかった。私を妊娠中、切迫早産で入院していた母は、医療保険にどれだけ助けられたかをことあるごとに話す。入院費自体は高額療養費による払い戻しのおかげで自己負担は抑えられるものの、公的医療保険適用対象外の食事代、消耗品代などは全額自己負担なので入院が長期になるほど大きな負担がのしかかる。しかし、母の場合は加入していた医療保険の給付金のおかげで金銭的な心配を最小限に過ごすことができた。また三歳上の兄の保育園代もそこから捻出できたことがあった、と話す。医療保険で受け取れる保険金は使い道が限定されていないので、それぞれが必要な部分をサポートしてもらえる。思いがけない「もしも」に備えて自分や家族を守る生活保障の仕組みが「生命保険」であることを私はその体験談から理解していたので、生命保険に加入が難しいという現実には漠然とした不安を覚えた。

誰もが経験する可能性のある病気やケガ、介護などのリスクに関して公的保険制度では賄いきれない不安をコントロールする、信頼関係を基盤とした相互扶助システムを生命保険と呼ぶ。近年、生活水準の上昇に伴う支出の増加で家計の負担も増加している。そんな中「もしも」が起こると、たちまち収支のバランスが崩れる。経済的負担がもたらす不安感や生きる気力さえ失わせるかもしれない。しかし、生命保険と社会保険という助けあいの仕組みが機能している限り、人は「もしも」に向き合う力をみなぎらせ、一步を踏み出すことができると思う。

ある日、母が息せき切って私に言った。

「十八歳から加入できる保険あるって！」と。

## 第61回中学生作文コンクール

我が家のファイナンシャルプランナーさんに両親が相談したところ、すぐさま保険を提案してくれたという。通常の保険と比べて告知項目が少なく、告知内容も緩やかなものらしい。相互扶助の公平性を保つため、リスクに応じた保険料の負担や条件はあるものの、私は嬉しかった。保険という備えがあれば、臆病な私も人生に挑戦する力がわく。そして、今は周りの人に助けてもらうことが多い私も、生命保険に加入することで間接的に誰かを助ける側にもなれる喜びも感じる。そして何より、保険を通じて「成人した後も、娘の人生が続いていきますように」と、未来の私に想いを馳せた両親の愛に胸が熱くなった。私も将来、大切な誰かを応援する気持ちを保険に託せますように、と願う気持ちになった。思わず母に「今までのことも、保険のことも、いつもありがとうだね。」と伝えた。

私は思う。家族や大切な人がいてくれるからこそ、私達は生を喜べるのだとしたら、生命保険は互いを思いやる気持ちや伝える手段かもしれない。人生は思いがけないことが起こるもので、もちろんお金で命や愛は買えない。しかし、命や愛を守る安心感を生命保険に託すことはできる。絶対的な安心感だ。これからも私は病氣と向き合い、可能な限りの健康管理をする。そして「生命保険」という人生に寄り添ってくれるパートナーと共に、人生を自分の足で着実に、歩んでいきたい。